

生物研究

第 XII 卷 第 3·4 号

1968

THE LIFE STUDY

Vol. XII, Nos. 3-4

November 20, 1968

FUKUI, JAPAN

目 次

報 文

- 濟州島の蜂 (英文) 常 木 勝 次 … (49)
 長野県伊那地方のアナバチ科 羽 田 義 任 … (55)
 ヒメツチスガリとニッポシツチスガリの雄について 常 木 勝 次 … (58)

短 報

- セグロアカアシアナバチ台湾亜種の造巣生態について (英文) 常 木 勝 次 … (54)
 モモコフキアブラムシの捕食虫 佐々治 寛 之 … (59)

旅行採集

- ヨーロッパのハチ管見記 羽 田 義 任 … (60)

採集案内

- 台湾採集案内 (特に蜂採集について) 常 木 勝 次 … (68)

書 評

- A. Burges and F. Raw 編: 土壤生物学 K. T. 生 … (57)

蜂類研究手引 (24)

- (特1) 数種アナバチ科の紹介 (65)
 会 記 (79)

CONTENTS

- Tsuneki, K. Some Hymenoptera from Quelpart Island, South Korea (49)
 Haneda, Y. Some Sphecidae collected in the Ina District, Nagano Prefecture (55)
 Tsuneki, K. Notes on the male of *Cerceris carinalis* Pérez and *C. nipponensis* Tsuneki (58)
 Tsuneki, K. Notes on the nesting biology of the Formosan race of *Sphex*
haemorrhoidalis Fabr. (54)
 Haneda, Y. A glimpse of the European solitary wasps (60)
 Tsuneki, K. Guides for the wasp collectors to Formosa (68)

会

規

昆虫学の同好者は、誰でも本会に入会することが出来る。
 本会は、適宜談話会(当分年二回)を開き、また採集会を行なう。
 本会は会誌を年2回発行し、会員は自由にこれに寄稿することが出来る(ただし当分1印刷ページにつき全文のものは500円だけ、図は1論文1個とし、それ以上の分は原則として著者負担とする。原稿の形式を本誌既出論文に準じ、編集係宛送付のこと。)
 入会の希望者は、郵便連絡地(勤め先または住所)を明記の上、福井市文京3丁目福井大学教育学部生物学教室生物研究刊行会あて所定の年会費(750円)を添えて申込まれたい。

蜂類研究手引 (24)

(特1) 数種アナバチ科の紹介

常木勝次

A Guide to the Study of the Japanese Hymenoptera (24)

(S 1) On some Sphecid species

By K. Tsuneki

(1) 奄美大島のオクムラツチスガリ *Cerceris okumurai* Tsuneki

奥村忠男君が1967年7月28日に新村で採集した1♀に基づいて記載された。非常に特徴のある美麗種である。

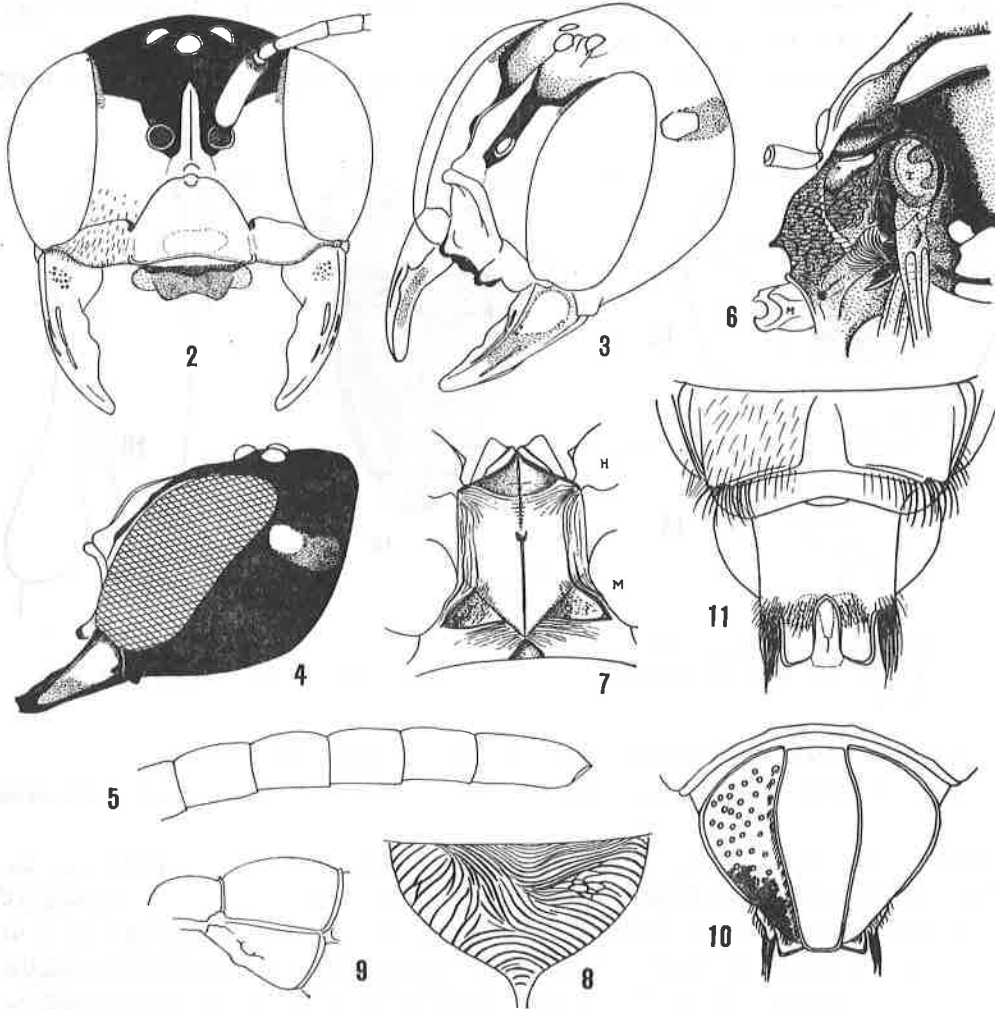
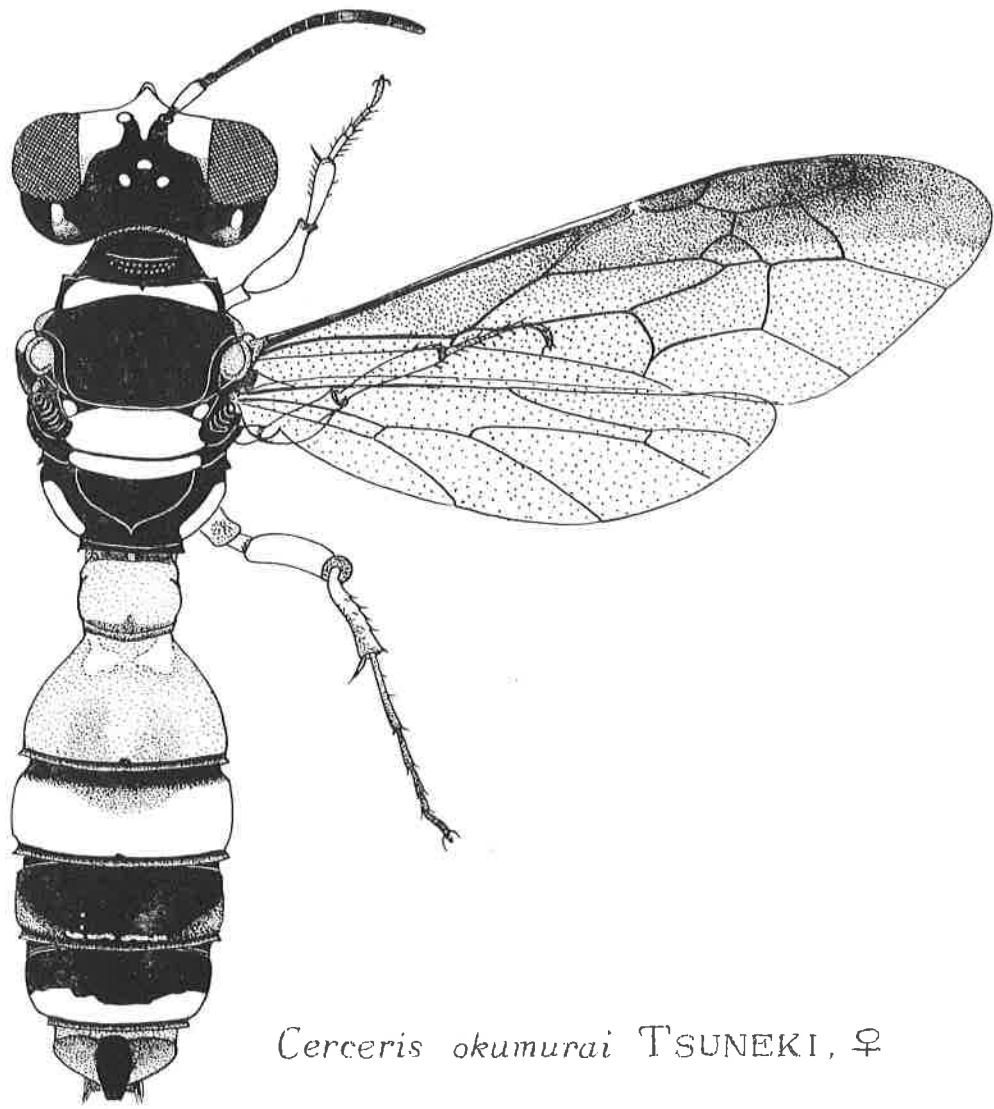


図1-11. オクムラツチスガリ (♀)。

図2-4, 頭部。図5, 触角先端部。図6, 中胸側板, 上後方より見る。図7, 中胸腹板; H, 後脚基節; M, 中脚基節。図8, 前伸腹節心形域。図9, 第1,2腹節の側面観。図10, 尾域。図11, 第7腹面節。



Cerceris okumurai TSUNEKI, ♀

るが、♂は未発見である。同地を訪れる人は特に注意されたい。

全形は貼付の図のようである。大きさ 13.5 mm, 図の白色部は白, 点描部は赤黄色, 頭楯は独特の形状を呈し (図 3, 4), 中胸側に 2 個の突起があり (図 6.), 第 7 腹面節は先端部に側突起をもつ (図 11)。第 2 腹面節は 2 個の円隆起を具える点でソボツスガリに似ている。その他図から想像されたい。心形域の彫刻には変異があるものと思う。

(2) キョウトジガバチモドキ *Trypoxylon kyotoense* Tsuneki

大きさ, 全体の形状, 色彩ともオオジガバチモドキ *T. malaisei* によく似ているが, 頭楯前縁中央に突起がなく, 全体として丸味をもった鈍三角状 (この点でキスケジガバチモドキとも異なる) である。特に大顎は暗褐色で, その基部黒色の地の外縁先端に近く白色の大斑がある点で非常に顕著である。

1946年 9月 5日に京都府貴船で採集された 1 ♀をタイプとする。♂は未知。

(3) コウノスジガバチモドキ *Trypoxylon konosuense* Tsuneki

♀. 大きさ 10~11 mm, 全体黒色, 頭楯の形状に顕著な特徴があり, 容易に他種から区別できる (図 12)。中節の彫刻 (図 14), 第 1 腹節の形 (図 15, 16) にも特徴がある。

南部敏明氏が埼玉県鴻巣で 6月に採集された 2 ♀と, 下山健作氏が青森県木造町で 8月に得られた 1 ♀に基づく。♂は未知。

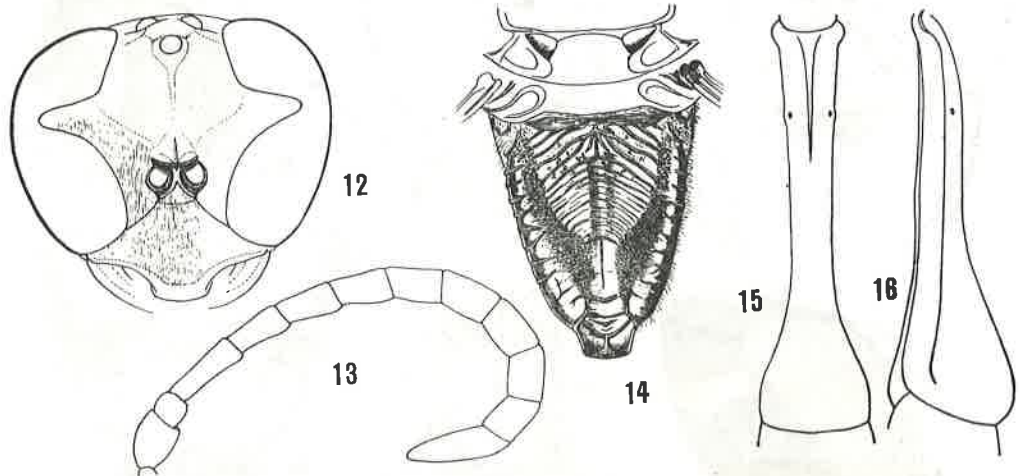


図 12-16. コウノスジガバチモドキ (♀)。

図 12, 顔。13, 触角。14, 前仲腹節 (および後楯板, 楯板)。15, 第 1 腹節 (上面)。図 16, 同上 (側面)。

(4) ナンプツヤバチモドキ *Alysson (Didineis) sibiricus nipponicus* Tsuneki

これも南部氏が鴻巣で採集された 1 ♀をタイプにして記載されたものであるが, *Didineis* は日本初記録である。

Didineis は学者によって独立属として扱われたり, また *Alysson* の亜属として扱われたりしている。Handlirsch, Schmiedeknecht, Berland, Gussakovskij, 米国学者らは独立属としている。これに対して Kohl, Noskiewicz and Pulawski, Beaumont らは *Alysson* の亜属としている。両者の一番大きな違いは羽の脈にあって, 前羽の小脈 (24, 25 図の矢印) の位置の相違がそうであるが, 径室の形なども, かなり違う。その形態は *Alysson* に非常によく似ているが, ♀の触角末端節の形が違い, また腹部につやがない。一般に腹部の基部が赤色になっているのであるが, 日本産のものは, その原種 (シベリヤのイルクーツク産の 1 ♀で Gussakovskij が書いた) とともにからだ全体が黒色である。ただ触角柄節前面だけが黄色い。原

種とは、第2次性徴を別としても、顔の毛の色、体の彫刻などに多少の差異が見られる。

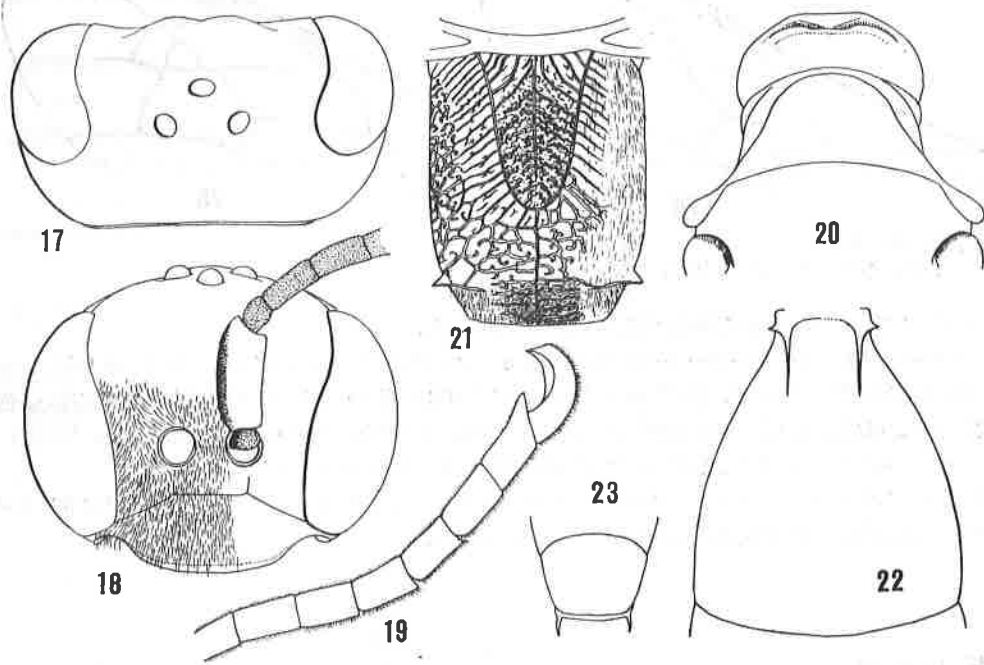


図17-23, ナンプツヤバチモドキ (♂)。
図17, 18, 頭部。図19, 触角。図20, 前胸。図21, 前伸腹節。図22, 第1腹節 (上面)。図23, 尾域。

私見では *Didineis* は属と亜属の間くらいの所で *Alysson* と分けるのが最もよいと思われるが、そういう段階はないし、また造るべきでもないで、相互関係を示す便宜上 Kohl らに従ったわけである。

この結果、今後は、これまで単に *Alysson* といってきたものは、*Alysson (Alysson)* と亜属まで書かなければならないことになった。

なお、私が本誌9巻1・2号に書いた *Nyssoninae* の Key の中では、次のように挿入される。

- 3 第2肘室は2本の反上脈をうける。腹部は幅広く卵形 (以下略)
- 第1第2肘室はそれぞれ第1第2反上脈をうける (ときに第2反上脈は中間状のことがある), 腹部はより細長い, 羽の縁紋は大きく明瞭 3'
- 3' 体に光沢があり, 第2腹節に1対の黄白紋がある。前羽の脈は図25のよう。中節後面両側の突起は弱い *Alysson (Alysson)*
- 体に光沢がない, 第2腹節に紋はない。前羽の脈は図24のよう。中節後面両側の突起は小棘状だが *Nysson* ほど強くない *Alysson (Didineis)*

Didineis の生態については、欧州の *lunicornis* という種について、Ferton (1911) がアルジェー近辺で観察した記録がある。彼によると、その巣は家畜の足跡の穴の側壁から掘りこまれ、2~3 cm 水平に走った後、ほとんど垂直になって15~20 cm 入り、1 育房に連なって終わる。Prey は小形の同翅類で、この点 *Alysson* によく似ている。その後1921年にデンマークで Henriksen が prey を見ているが、やはり小形の同翅類だった。

(5) ヒウラギングチ *Crossocerus (Coelocrabro) hiurai* Tsuneki

大阪科学博物館の日浦勇氏が大阪府下の河内長野で、1962年6月12日に採集された1 個に基づく。

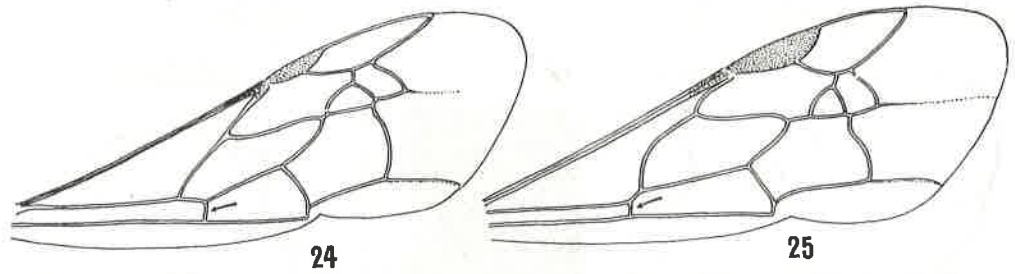


図24-25。翅脈。
 図24, ツヤバチモドキ。図25, ツヤバチ。

私のヒメギングチの Key (1959) では次のように導かれる。

2-9-13-14-15-16-18-19-20-21でチュウゼンジギングチの項へ行くが、これと一致しない。頭楯前縁中央は逆梯形状である、前胸は前縁反りかえていない、第1腹節は後端の幅よりわずかに長い。色彩は大いに異なり、頭・胸部に黄斑が多い。特に、大顎の大部・頭楯の大部・頭下部・触角下面、胸側紋、胸部下面の黄斑等顕著である。また腹部に赤黄斑はない。大きさ4.5 mm。♀は未知。

以上紹介した5種のうち、1, 3, 4の3種の記載は当教室発行の *Etizenia* の27号に、2および5は大阪自然科学博物館報の19号にそれぞれ出ていることを付記する。

採集案内

台 湾 採 集 案 内 (禁複写)

常 木 勝 次

Tsuneki, K: Guides for the wasp-collectors to Formosa.

台 湾 事 情 一 般

まえがき 今年の夏、予定のように約3か月間、台湾へ2度目の採集に行ってきた。今年は台湾の有名採集地は日本からの若い虫屋のブームで、どこへ行っても、いつでも、何組かの捕虫網を持った連中に出あった。彼らは2人か3人の組になっているものが多かったが、中には私と同じように単身採集している者もあった。そのほとんど全部が蝶々屋さんで、中には観光かたがた蝶をとり、帰ってからそれを売って旅費の一部を埋めようというチャッカリ屋もいたようである。

考えてみると日本も台湾も米ドルを中介にして通貨の交換レートをきめており、日本は物すごく物価が上がって貨幣価値がどんどん下落しているのに、台湾はそれほどひどい物価の変動がなく、それでいて両国の交換レートは昔のままとなっているのだから、日本円を台湾円(台湾ドルといっている)に換えると、その実質価値が大分上昇するわけである。事実現在の交換レートでは日本円9円が台湾円1円になっているが、台湾円1円は実質的には日本円の30円くらいの価値があるようである。だから、日本では10日しか旅行できない金で、台湾では1か月も旅行できることになるわけである。こんな事情で学生たちが、アルバイトでためた金や、親からせびった僅かの金で、どんどん台湾へ出かけて行って観光し採集しまくることができるのである。